View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by National Institute of Polar Research Repository

村山雅美元国立極地研究所次長を悼む

元国立極地研究所次長，国立極地研究所名誉教授村山雅美先生は，2006 年 11 月 5 日，逝去されました．享年 88 歳．わが国の南極観測草創期から今日まで，その構築と発展に心血を注いでこられた村山先生に心からの敬意を捧げるとともに深謝申し上げ，ご冥福をお祈りいたします．その多大な業績は，南極関係者のみならず広く社会に知られているところであります．ご葬儀に参列された方々を拝してもよくわかりますように，多くの知己，お仲間がおられる中で，私ごときが追悼の記を書かせて頂くのは，烏滸（おこ）の沙汰ではありますが，南極観測の様々な局面で長く恩顧をこうむった一人として，私の想い出を中心にありし日を偲（しの）ぶこととし，あえて筆をとらせて頂きました．ご寛恕（じょ）をお願いする次第です．

村山さん，先生と呼ぶべきかと思いますが，これは村山さんにとって決して相応しいものではないと考え，以下あえてこのように呼ばせて頂きます．村山さんは 1918 年（大正 7 年）3 月 28 日，ご著書によれば東京でご両親とも教育者のご家庭にお生まれになり，東京高等師範学校の附属小学校，中学校へと進まれました．名門校で多くの優れた先生やお仲間に出会われ，中でも 1914–16 年のシャクルトン隊に参加されたオードリーズさんの教えを受けられたというのは，南極との縁（えにし）の妙を想わせます．私も後述の 1976 年アルゼンチン，チリと村山さんのお供をしたときにも，附属で同級生であられた当時のチリ大使山下重明氏の大使公邸で，一夜を過ごさせて頂き，その余徳の恩恵を受けました．附属中学での山岳部長山本幸雄先生の大陸移動説にも言及された授業にも感動され，山岳部へ入部，そして旧制松本高等学校へ進学，登山の道を突き進み，東京帝国大学経済学部に進学してからは「東京帝国大学スキー山岳部（通称 TIUSAC，現在は TUSAC）」に属され，活躍されました．第 2 次大戦後間もなくの我が国の壮挙の一つであった日本山岳会マナスル登山隊に参加されておられたとき，我が国の南極観測参加が決まり，東大スキー山岳部 OB の組織である「東大山の会」の協力が求められた際，山の会の総意として村山さんが，いわゆる設営部門の総括を担当できる，この人を措いてはほかにない方として推薦されたと承っております．マナスル登頂を目前にして，いかにすべきか熟慮の末南極観測隊への参加を決断されました．南極観測はいわゆる予備観測から本観測と 3 年間ほどの計画とされていたときでした．

私が尊顔を拝したのは，最初の乗鞍岳訓練が行われた頃のことです．ご一緒に東大病院で観測隊参加の最初の関門とも言うべき身体検査を受診したとき，村山さんがヒマラヤで五千メートルを超えると心臓がパクパクするのだが，と若いお医者に話されたのをなぜか覚えています．山での勇姿のほかに，痩身でお洒落，スマートに背広を着こなす村山さんは，ベストドレッサーに選ばれたこともあります．観測隊員候補の中では最も若輩のひとりであった私には，眩しいような存在でした．やがて予備観測と呼ばれた第 1 次観測隊の幹部として村山さんは南極へ，私は次の年第 2 次観測で，副隊長として永田武隊長を補佐するとともに越

冬隊長となられた村山さんの部下として，越冬のお供することになりました．観測船「宗谷」が日の出桟橋を出航する当日，流行性感冒に罹（かか）っていた村山さんは，半ば担ぎ込まれるようにして乗船され，やがて狭い船内で次々と感染が飛び火し，食堂から食事を各船室へ同僚が運んだのも，村山さんと結びついた懐かしい記憶です．

第 2 次観測は厳しい海氷に阻まれ，推進器のスクリューを折りながらも，「宗谷」は来援した「バートンアイランド」号とともに昭和基地接近を試みましたが，果せませんでした．この時，小型雪上車を駆っての突進や，たった 1 回の小型機ビーバーの飛行で 7 名が決死の越冬を行うべく準備を進めるなど，村山さんは力の限りを尽くされましたが，計画は成りませんでした．

帰途寄港したケープタウンで車を借り，村山さんと第 1 次越冬隊の佐伯富男さんにお供して，一泊旅行に出かけた時のこと，テントを小さな池のほとりに張ってから近くの田舎のホテルに行ったところ，オーナーは言を左右にして白人用の食堂に入れてくれず，他の部屋に案内しようとしました．村山さんは納得しませんでした．やがて警官を含む数名の白人のお客がやってきて，事情を聞きました．村山さんと二言三言話をした警官が仲間とわれわれに，一緒にやろうと言ってアルコールで歓を尽くしました．アパルトヘイトの壁も村山さんの機

セールロンダーネ山地の麓のキャンプ地で（第 27 次観測，1985 年 12 月）

智とお人柄が破ったのです．

その後村山さんは第3次，5次，9次の越冬隊長として，また第7次，15次の夏隊長として，現地での観測の指揮をとられるとともに，中断された南極観測の再開と「ふじ」の建造，「しらせ」の建造，「しらせ後継船」建造の推進と縦横のご活躍をされました．国際的にも，いち早く第3次でアメリカ国務省メロイさん，第5次でアメリカ海軍水路局ボクセルさんをオブザーバーとして観測隊に迎え入れ，また，のちSCAR（南極研究科学委員会）の設営部会の我が国代表として長く活躍され，多くの著名な極地専門家と交流され，そのお人柄，ユーモアとで皆さんを魅了されたのです．

私は第2次以降は第4次，8次，16次と村山隊と一つずつずれる観測隊参加となりました．第3次・4次引継ぎのときは積雪が多く，夏でも水面の見えない池が多くありました．村山さんが基地の先の定着氷のタイドクラック手前の雪面を指さして，「この下に橇があるから引き継ぐぞ」と言われました．この橇を見ることができたのは第8次の夏，すっかり回りの雪が融けて，雪の柱の台に乗ったような状態で鎮座している姿でした．第8次・9次の時は福島　紳さんの遺体が第9次隊によって発見され，西オングル島の現地で荼毘（だび）に付された遺骨を私が背負って昭和基地へ戻り，村山さんの厳しい眼差しのもと，隊長室にそっと置きました．この年（1968年），第5次隊での南緯75度到達以来村山さんが暖め続けてきて，南極観測再開後の重要課題の一つとして取り上げられた南極点トラバース計画を，これに耐える大型雪上車の開発を始めとする綿密な設営計画と，未知の大陸を探る多様な観測計画，そしてこれを遂行する優れた隊員と，すべての準備を整えて見事に成功させました．この成果は秩父宮記念学術賞に輝きました．第7次，8次観測もその布石の一つでした．私たち8次隊もその一翼を担うことができました．この南極大陸奥深くのトラバースの経験と開発された大型雪上車は，その後の広域にわたる雪氷学的調査，さらには隕石の発見と大量採集の成果へと繋がったのです．

その後7年余りを経て，私は国立極地研究所に移り，永田所長，村山次長（村山さんのみ企画調整官を次長と呼んでよいこととなっていると伺いました）にお仕えすることになりました．1976年10月，急に第18次観測隊長として南極へ行かれることになった楠宏研究主幹に代わり，アルゼンチン，メンドーサでのSCAR総会と雪氷学部会などに出席することを命ぜられた私は，永田所長，村山次長にお供することになりました．ここで村山さんの国際的な交友の広さの一端を垣間見ることができました．会議に，またこれを彩るイベントに，SCAR幹部の中で自由闊達な村山さんの面目躍如たる活躍がありました．SCAR会合終了後，小型バスをチャーターしてのアンデス越えを企画，私も誘って頂きました．途中で撮影したカラースライドを見ると，村山さんと肩を並べてSCAR会長イェルスビク，事務局長ヘンメン，のちの会長となるロース，ノックスらの姿があります．

これから9年後，村山さんは私が夏隊長を務めた27次観測隊に，南極本部委員，南極輸送

問題会議の委員として，視察のため同行されることになりました．私は 27 次隊員たちに「村山さんと私がご一緒するので，「しらせ」でもビセットされるかも知れないぞ」と半ば冗談，半ば本気で覚悟を促しました．ところが昭和基地東方の海域で，「宗谷」と同じ 40 日間ほどビセットされていたオーストラリアのチャーター観測船「ネラ・ダン」を救援することになりました．その顛末を「助けたり助けられたりソレンセン」と題して日本極地研究振興会の会誌「極地」にまとめられました．「ネラ・ダン」船長ソレンセンと，「宗谷」が救援を受けたソ連船オビを掛けた表題です．こうした機智に富んだネーミング，あだ名を付ける名人であった村山さんの面目躍如でした．村山さんの頭の中には様々なアイデアが渦巻いており，その溢れ出る言葉に，時について行けない思いがしたのは，私だけではなかったでしょう．これはお書きになった文章の独特の文体にも表れているように思われます．極地設営は当然として，自然の営みにも鋭い眼をむけ，例えば暴風圏の気象・海況と大陸周辺の氷状の関係で，示唆に富むお話も伺いました．

怒ったお顔を一度も見せずに私達を引っ張って下さった村山さん，そのお仕事と想いは永遠に語り継がれることでしょう．南極観測のこれからをお見守り下さい．

合掌

平成 19 年 2 月

吉田栄夫
（国立極地研究所・立正大学名誉教授）